

# 学 位 論 文 要 旨

氏 名 岡本 旅人



論 文 題 目

「 A Retrospective Study of Treatment for Curative Synchronous Double Primary Cancers  
of the Head and Neck and the Esophagus 」

(頭頸部癌と食道癌の同時性重複癌に対する治療に関する後方視的検討)

指 導 教 授 承 認 印

山下

拓



# A Retrospective Study of Treatment for Curative Synchronous Double Primary Cancers of the Head and Neck and the Esophagus

(頭頸部癌と食道癌の同時性重複癌に対する治療に関する後方視的検討)

氏名 岡本 旅人

## 【目的】

頭頸部癌と食道癌は高頻度に重複するが、両者の同時性重複癌 (Curative Synchronous double primary cancer of head and neck and esophagus: CSC-HE) における画一的な治療戦略は確立されていない。そこで今回、CSC-HE における適切な治療戦略を検討するために、臨床経過と治療成績を後方視的に調査した。

## 【方法】

2010 年 1 月から 2014 年 12 月までに北里大学病院で診断した食道扁平上皮癌 674 例のうち、同時に頭頸部重複癌を認めた 33 例を後方視的に調査した。同時性の定義は、頭頸部癌、食道癌ともに初回精査時に発見されたものとした。早期食道癌の定義は、粘膜にとどまり、かつ転移のないものとし、進行食道癌は粘膜下以深に浸潤するもの、もしくは転移のあるものと定義した。早期頭頸部癌の定義は、上皮下にとどまり、かつ転移のないものとし、進行頭頸部癌は固有筋層以深に浸潤するもの、もしくは転移のあるものと定義した。CSC-HE の進行度は以下の 4 群に分類した。Group A : 早期頭頸部癌・早期食道癌、Group B : 早期頭頸部癌・進行食道癌、Group C : 進行頭頸部癌・早期食道癌、Group D : 進行頭頸部癌・進行食道癌。治療方針は、がん治療医が放射線治療科や外科、内視鏡医と協議の上、決定した。導入化学療法は TPF 療法 3 コース (Docetaxel 75 mg/m<sup>2</sup>、Cisplatin 75 mg/m<sup>2</sup>、5-FU 750 mg/m<sup>2</sup> × 3 週間ごと) を用いた。導入化学療法や化学放射線療法による有害事象は CTCAE ver.4.0 に基づいて評価した。化学放射線療法の有害事象は急性期と晩期に分け、治療開始から 90 日以内を急性期と定義した。

## 【結果】

対象 33 例の年齢中央値は 67 歳であった。頭頸部癌の原発巣は中咽頭 2 例、下咽頭 25 例、喉頭 6 例であった。食道癌の原発巣は頸部食道 4 例、胸部上部食道 5 例、胸部中部食道 17 例、胸部下部食道 7 例であった。Stage 分類では、頭頸部癌は stage I 11 例、stage II 12 例、stage III 7 例、stage IV 3 例であった。食道癌は stage I 13 例、stage II 5 例、stage III 10 例、stage IV 5 例であった。CSC-HE の進行度は、Group A 1 例、Group B 9 例、Group C 3 例、Group D 20 例であった。観察期間中央値 26 か月において、全体の 2 年全生存割合は 67.4%であった。早期癌を重複していた 13 例の 2 年全生存割合は 83.3%であった。いずれも進行癌であった 20 例の 2 年全生存割合は 62.6%であった。全対象のうち 10 例は内視鏡的切除が可能な病変を有しており、2 年全生存割合は 100%であった。内視鏡的切除が可能な病変を有していなかった 23 例の 2 年全生存割合は 58.1%であった。導入化学療法による有害事象は、好中球減少症が 87.5%と最も多く、次いで貧血と低ナトリウム血症が 37.5%と多かった。導入化学療法後の化学放射線療法による有害事象は、好中球減少症が 63.6%と最も多く、次いで貧血と食欲不振が 54.5%と多かった。

#### 【結論】

当院における CSC・HE の治療成績は比較的良好であった。両者ともに進行癌を伴う CSC・HE の場合、導入化学療法として TPF 療法を実施する治療戦略は、選択肢の一つとなりうる可能性がある。